

レポーター：学芸員の又野さんです。よろしくお願いします。又野さんこちらではどのような作品を紹介してるんですか。

学芸員：江戸時代の福岡藩の女性の文化人ということで有名な方の作品をご紹介します。

レポーター：貝原東軒さん。こちらはどいった方ですか。

学芸員：この肖像の方は貝原益軒さんこの方の奥さんが、貝原東軒といわれましてね、旦那さんと仲睦まじくされて、こちらにありますように、益軒さんがいろいろ書いた書物とか論文とかを、非常に達筆な筆で清書されると。

レポーター：一文字一文字、きれいですよね。

学芸員：そうですね。

レポーター：こちらは、どいったことが書かれているんですか。

学芸員：儒学者の貝原益軒さんの論文ですから、まあ道徳的に人間はどうやって生きるべきか、というようなことが書いてありますけれども。はい。で一番最後に東軒と書かれています。東軒さんは、益軒さん、旦那さんの仕事のいろんな代筆をしたりですね、そういうこともされたそうです。はい。

レポーター：すごく仲がいいんですね。

学芸員：そうですね。こういう書に優れただけでなく、音楽とかですね、和歌とかそういうものをたしなまれて、益軒さんと一緒に楽しまれたんじゃないかと。

レポーター：こちらはどいった作品なんですか。

学芸員：こちらはですね、亀井少榘という方のいろんな作品をずっと展示しております。大体18世紀の終わりくらいから19世紀になって活躍された儒学者の方です。非常に学者の一家ということで、子供のころからですね、教育や薫陶を受けられたと思います。それで漢詩とかですね、非常に優れておられて、またいろいろ大きくなってもですね、絵とかですね、描かれてですね、有名になった方です。

レポーター：こちらもきれいですね。

学芸員：そうですね。これも晩年の作品になると思いますけども、よく好まれた題材が竹とかですね、菊。それから蘭。今、向こうにたってますけど、梅。そういうのに漢詩をつけてですね、ひとつの作品にされるということですね。それがあるのがこちらの方。これは梅。これなんかはご主人の雷首という方だったのが一応言葉を添えて、亀井少榘さんもこうやって添えてですね、まあ1つの作品の中に夫婦と一緒に描かれて。

レポーター：共同作なんですか。

学芸員：こちらはお父さんの亀井昭陽という方の賛っていうんですか、言葉が添えてあると、絵は少榘さんが描いた。そういう文化活動を一家でされたのがわかって。

レポーター：又野さん、こちらは。

学芸員：こちらはですね、二川玉篠さんという名前は滝っていう方ですけども、こちら
はですね、19世紀に入ってからの方ですが、非常に絵画に優れてと。

レポーター：そちらも梅の花ですか。力強いですね。

学芸員：言い伝えによりますと、非常に活発な方、今でいうとスポーティな方ですかね。
そういう方ですので、こういうだいたんな描写というんですか、はい。ただ、それだ
けではなく、こちらは普通の梅、こちらは雪。こう塗らないところで雪を表すって
いうのは非常に。

レポーター：そうですね、こちらに比べてちょっと白い部分が。

学芸員：非常に面白いというか、絵を描かれてるという。

レポーター：絵の隣にある字は、これは。

学芸員：これはお父さんの二川相近さんがこの絵に合った題材の言葉を添えているん
です。

レポーター：また親子共同作ですね。

学芸員：そうですね。こちらは梅の花を若い人に例えて。何といたしますか、そういう華
やかな器量の言葉が添えてますけども、こっちはですね、雪が降って、みんな驚いて
るまだ春が遠いんだぞということがちょと書かれてあったりする。なんかちょっとし
た面白いコメントがですね、つけてあります。

レポーター：へえー。

学芸員：二川相近という人の非常に優れた書道の方の字も同時に見ることも。

レポーター：味わえるんですね。

学芸員：ということです。

レポーター：こちらは。

学芸員：こちらは野村望東尼さんですね。幕末明治維新にかけて筑前の勤王運動とい
うんですか、そういう中で必ず取り上げられる方として、若いときからの作品、で最後、
亡くなられたときの絶筆まで、一応並べております。この方は非常に和歌を若いとき
から勉強されるということで、二川相近さんという人の弟子になったりですね。こ
ういろいろ書かれて。向陵集というのがありますけども、これは野村望東尼の山荘とい
うのが、平尾に残ってますけども、そこに旦那さんとですね、すごした日々とかです
ね、和歌にしてですね、いろいろ書いてると。

レポーター：こちらは子供の。遊んでる。

学芸員：野村望東尼さんというのは後妻さんで入ってまして、4人くらいお生みにな
ったということなんですけども、まあ実子は育たなくてですね、早く亡くなられてしま
った。先妻さんの残されたお子さんは非常に武士として厳しく愛情を持って教育され
たと。これもいつ使われたかわかりませんが、そういう過程でですね。子供達にで
すね、愛情を注がれたという細かいいろんな面白いですね。

レポーター：毬つき、凧揚げ。

学芸員：姿っていうんですか、そういうのが偲ばれるっていうものですね。

レポーター：すごいですね。

学芸員：お孫さんに作ってあげた手作りのですね、鎧。

レポーター：手作りの鎧ですか。

学芸員：非常に愛情のこもった作品なんだと思います。

レポーター：すごいですね。

学芸員：こちらがですね、野村望東尼さんも幕末の最後のころになりますと、福岡の有名な大隈言道という、その人も直接弟子になってですね、非常に和歌の道に励まれたということで、それ以降に幕末の、まあ政治の動乱というんですか。それと重なって、勤皇の歌人というようなことをいわれますけども、非常に長い間いろんな人生を送ってこられたというのがわかると思います。これもう最後になって勤皇法度のかかわりで、協力したとかかくまったということで福岡藩にですね姫島に流されるんですけども、まあそのあと脱出されてですね、脱出した先の山口県の防府市、三田尻っていうところですけども、そこで亡くなられた。それが絶筆があるんです。

レポーター：こちらでは文化人として、活躍された女性の皆様のなんか繊細なね、貴重な作品が見れるんですね。

学芸員：はい。

レポーター：ありがとうございました。

学芸員：はい。ありがとうございました。